

＜中学校 学級経営＞

「共に生きる」を考える学級経営

—対話・交流活動を通して—

糸満市立西崎中学校教諭 加 勢 美智子

内容要約

学級内でのトラブルの多くに生徒間の仲間意識の乏しさを感じる。そこで学級経営の年間指導計画の中に「共に生きるシリーズ」と銘打った時間を位置づけた。その中で対話・交流活動を活発化する多様な場を設定した。また授業を通して意見を述べ合い・聴くことによって、自分の内面を見つめる機会となり、同時に学級の人間関係に共感・安心感が広がり「共に生きる」を考える糸口になった。

【キーワード】 共に生きる 人間関係 話し合い 心の居場所

目 次

I	テーマ設定の理由	51
II	研究仮説	51
III	研究内容	52
1	「共に生きる」の基本的な考え方	52
2	他者との関係に見る現代の子どもたち	52
3	「共に生きる」環境づくり	54
4	「共に生きる」中の対話・交流活動	55
5	「共に生きる」学級経営	57
IV	授業実践	58
1	検証授業について	58
2	検証授業	58
3	授業の考察	60
V	研究の成果と今後の課題	60

I テーマ設定の理由

高度に発達した情報化社会、そして国際化、変化の激しい現代、多種多様な価値観が氾濫するこの21世紀に生きる子どもたちが、自らの能力を存分に発揮しよりよく生きていってほしい。親や教師の切なる願いである。今回の指導要領改定でも〔生きる力〕の育成が基本的なねらいとされ、3つの柱の中に「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」が大切な能力として打ち出された。各自が勝手気ままに行動するのではなく自他ともにかけがえのない存在として「共に生きる」視点こそ〔生きる力〕の重要な要素だと考える。

今日の中学生を見ても、まわりの友達を気にして自己表現できなかったり逆に自己中心的な言動が目立つなど人間関係の希薄な場面が多い。本校の二年生の実態を見ると例年以上に人間関係に起因するトラブルが多かった。仲良しグループの一人が仲間はずれにされたといって泣きついてきたり、「先生が〇〇にこういてほしい」など一つ一つ教師に持ち込むのも特徴で、他人への信頼感が持てずにびくびくしている子どもたちの姿も見える。人間関係がうまくいかず問題を抱え込む子、またその延長線上に「いじめ」「不登校」の問題を思うとき、この年齢にありがちなささいなトラブルとかがたづけられないどの子にも共通する根っここの価値観を問題として捉え直す必要性を感じた。まず学級担任として気になることは自分のこと、自分の都合、自分の利益ばかりに目がいき、周囲のことに思いがいたらない、わからない「共に生きる」という仲間意識の低さである。これまでの学級内のトラブルのほとんどはこの「共に生きる」姿勢の弱さから発生するのではないかと考えた。この間個別指導が多かった問題であるが、これはもっとも身近な「共に生きる」仲間としての学級集団のなかで、全員に関わる大切な問題として取り組むことが今求められていると感じる。

中学生の学校生活での一番の楽しみは友達とのおしゃべりだという。決して他者との交流を嫌っているわけではない。人間関係が希薄・コミュニケーション能力の欠如とか形容されがちな彼らではあるが、心の底では人一倍共感できる友達を欲し、自分を認めてくれる他者を求め楽しいクラスにしたいと誰もが願っている。また、一人の生徒の個別の問題であっても、学級全体で共通の課題とすることにより自分を見つめ他者への共感や寛容さにつながり「共に生きる」仲間意識や連帯感を生むのではないかと考えた。

そこで身近な問題でも公の場で言い合う、対話的な場を設定することによってお互いの理解が進み親近感を持つことができるだろうと考えた。また、いろいろな価値観や立場の人を学級にゲストとして迎えその交流活動を通して自分をみつめる機会をもたせたい。これらの活動を通して、クラスの仲間としての関わり合いや対話が増え生徒間の親密感・連帯感が生まれ「共に生きる」認識が深まるだろうと考え本テーマを設定した。

II 研究仮説

対話・交流活動を生徒と共に取り組むことを通して、お互いの理解や連帯感が生まれ「共に生きる」人間としての生き方の自覚が深まるだろう。

Ⅲ 研究内容

1 「共に生きる」の基本的な考え方

(1) 共に生きるとは

「共に生きる」とは自然との共生などいろいろ考えられるが、ここでは人間どうしの「共に生きる」とりわけ学級経営の中での関わり合いを考える場合と限定したい。学級の雰囲気がどのようなものであるかは子どもたちに大きな影響を及ぼす学級経営の重要なポイントだと考える。社会的動物といわれる人間は他者と関わることによってこそ「生きる力」が培われる。人と人がお互いの良さを認め合い・ふれあい・支えあいながら暮らしてこそ、生きる意欲もでてくるのではないか。このように考え学級経営の視点を「共に生きる」とし、生徒・親・教師の関係を（図1のように）①共に成長する②共に学びあう③共に力を合わせるを意識したお互いの関わり合いと捉えていきたい。

① 共に成長する

困っている気持ちやゆとりのない心が攻撃的なことばや非常識にも思える言動になる場合がある。人それぞれの良さも弱点も認め尊重してあげられる関係。お互い支えあい励ましあい今の自分を乗り越えお互い成長する喜びを一緒に分かち合えること。

② 共に学びあう

相手の話を良く聞き他者と話ができるということ。教師もまた未完成の弱点だらけの人間として、同時代を生きる仲間として自分の思いを語る。相手の考えや思いを理解しあい学びあうこと。

③ 共に力を合わせる

ものごとを協力し話し合いを密におこなう。知らないとか何とかお互い警戒したり誤解が生じやすい。お互いに関わり合いを大切に気持ちを通わせ力を合わせていくこと。

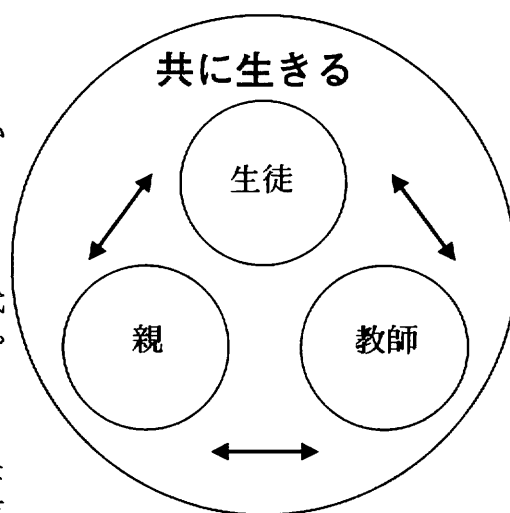


図1 共に生きる関係

2 他者との関係にみる現代の子どもたち

中学生の生まれ育った1980年代は高度成長の波に乗って第一次産業が廃れ、第二次・第三次産業へと大きく社会構造が変化した時代である。また、その結果人口の農村部から都市部への人口移動が76%にも達したといわれる。巷にはものがあふれ、生産する文化よりも消費がメインの文化と形容する人もいる。その結果子供たちが身近に接し育てられた家庭・地域・学校も相互行為の場が大幅に失われてしまった。子どもたちの現在の姿はいったい何故・そしてどこからくるものなのか。子どもたちがどういう社会的背景の中で育ってきたのかを理解することは、子どもたちとの関わりを有効なものにするために重要なことだと考える。

(1) 会話が減った家庭生活

まずは家庭のサイズが小さく核家族とよばれるようになり、一戸建てを求めて通勤時間が長くなり父親不在、また母親も家事労働の短縮と自己実現で仕事に出る人が多くなった。その結果、家族といえどもゆっくり会話したり、一緒に家族で汗を流して共同作業という関わり合いの姿は少なくなってしまった。忙しいということで、従来の家族仕事も外部注文が多くなった。

(2) 子どもに寛容でなくなった地域

農村部からは人が消えていき、都会の人は「隣は何をする人ぞと」ほとんど関わりを持たない。つき合いがないのでどうしてもお互い打ち解けず警戒心ばかりが膨れる。何か不都合が起きると役所に電話をしてどうにかしろという声を上げる人が多いという。そういう中で育つ子どもたちは、家族以外の多様な人たちとの交流・関わり合いのチャンスを失ってしまった。その結果子どもたちも周囲の人に安心して心を開かない。関わり合いの少なくなった地域社会は子どもたちにとって窮屈で寛容でないものになってきている。

(3) 仲間意識が育ちにくなった学校

学歴社会といわれ受験競争が激化する中で、中学生の頃から自分がどの位置にあるのか冷厳に示され並の頑張りではなかなか変らない。子どもたちの間の仲間意識や、連帯感・つながりというのが失われつつあり、子どもたちどうしも劣等意識か優等意識いずれかで見てしまう傾向がある。

「子どもを育てるとは人の子を人間として育てるというのはまずもって社会的動物としてすなわち社会力のある人間として育てること」（門脇厚司）の指摘にみるように成長過程における多様な人々との関わりを通して子どもは信頼感・愛着・共感・思いやりなどを学ぶとする指摘は多い。その学ぶ機会や場を私たち大人が良かれと思いめざした社会は、恐ろしいほどに奪ってきたという認識をもつことは子どもたちを理解する上で欠くべからざる視点だと考える。

(4) 遊びの変化（集団から個別へ）

子どもといえば遊びそれも大勢で群れ集まって遊ぶという子供時代の楽しいイメージも過去のものになりつつあるようだ。遊びが子どもどうしを結びつけ・子ども社会を成立させ自分たちでルールや秩序を形成してきた。

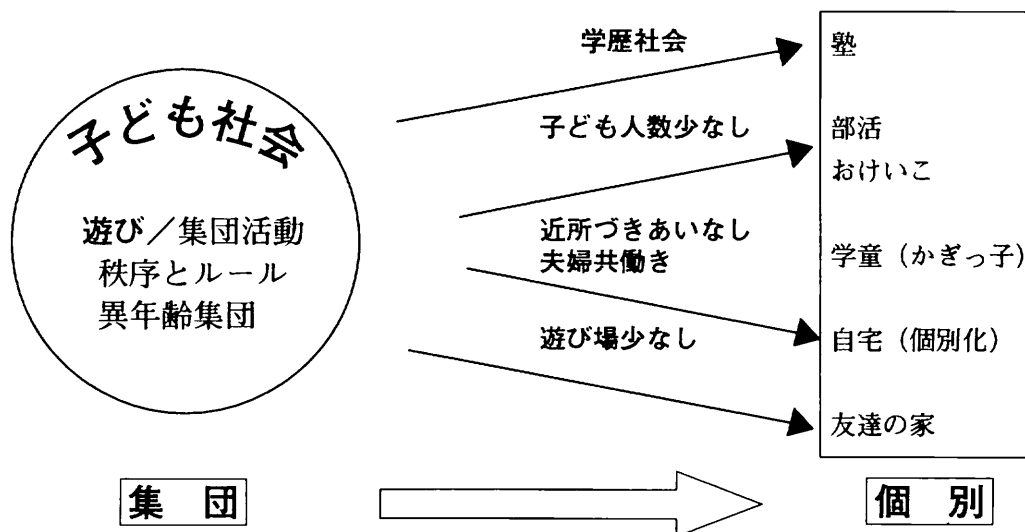


図2 子ども社会の変遷

ところがそれぞれのスケジュールを持つ現代の子どもたちは、集団で遊ぼうとすると、まず人数がそろわない。子どもがのびのび遊べる所は近くにない。それでもわずかな時間と空間を見つけて遊んでいると危ないと注意される。「子どもの遊びの原点は集団的活動」（住田正樹）であった時代は昔のこととなりかつての「子ども社会」は崩壊し近年子どもの遊びの個別化が著しくなっている。

このような行き場を失った子どもたちにとってテレビゲームの出現はまさに時機を得た救世主であったことだろう。しかし、今やその弊害は見過ごすことのできないほど社会問題となりつつある。

（図2 子ども社会の変遷）多くの人に指摘されている中で次の5点は子どもたちの他者との関わりを考えると重要である。

- ・ 並行遊びでお互いの関わりはほとんどなく、それぞれが勝手に遊ぶ。
- ・ 同級生との遊びが中心で、昔の遊びのようにさまざまに役割を経験することもなく過ごす。
- ・ いつでも自分の気が向いたときに気に入ったゲームソフトに向かったり、自由に消したりするなど自分の思いどおりに動かすことができる。
- ・ 室内でずっと座ったままで、身体を動かさず同じ姿勢のまま続ける。
- ・ ゲームの中で自分の考えや進め方によって応答があり擬似的人間関係が形成される。

この遊びの変化をみても、いかに子どもたちが多様な人間関係の中で関わり合う体験といったものに乏しくなったかが分かる。人と人が関わることも体験の積み重ねによって鍛えられる。その体験の乏しさゆえうまく人と関われないということが起こる。ちょっと異質な相手だと避けたいくなる。自分の思い通りにならないと心を閉ざす。他者との関わりが安定して初めて人はリラックスし自分をのびのび出せるものとする。その点で今中学生は自我の確立の時期ともあいまって、一人一人が切り離され横のつながりが乏しく不安の中にいるといえるだろう。

3 「共に生きる」環境づくり

ひとりの教師が効率的に多くの生徒を一斉に指導するための場として設けられた学級は、新たに一つの生活集団としての役割も担うようになった。第二次大戦後ずっと集団経営と教室経営の二つの条件整備が求められ、学級という集団の中で、社会性や自治能力に加えて子どもの豊かな人間性を育てることもその大きな役割となった。人と人との関わりを大切に一人一人が生き生きと活動する楽しい場所としての学級を「共に生きる」環境づくりとして考えてみたい。集団経営の中には、まず教師の姿勢こそ重要な位置を占めると考え、子どもを認め励ます教師の姿勢について考えてみた。また、教室経営の中では、これまでの教室掲示の方法を見直し創意・工夫することが重要であると考えた。

学級経営	(1) 集団経営・・・教師と生徒の間や生徒と生徒の人間関係を改善する。 学級活動 道徳 教科の授業 休憩時 放課後 当番活動
	(2) 教室経営・・・学習の環境や施設の整備を中心とする。 採光 照明 換気 保温 掲示物 机・いすの整備など

(1) 子どもを認め励ます教師の姿勢（集団経営）

学級の人間関係をどう作り、一人一人のよさをどのように伸ばしていくかが学級経営における集団経営の重要なポイントである。生徒のよさを発見し、個性を認め励ましていく教師として日々のかかわりの中で ①知る ②語る ③待つを基本として「共に生きる」を生徒と共に考えていく姿勢が必要である。

- ① 「生徒の実態」を知る努力・・・〈分かれようとする〉努力の積み重ねが大切である。クラスの交友関係を多様な方法でリアルに把握しつつ一人一人の顔を思い浮かべ分かれようとする努力をすること。
- ② プラス思考で語る・・・教師の物の見方・生徒に語る言葉はプラス思考でいきたい。「これしかないではなくこれならできる」「あれもだめこれもだめ」ではなく「これができるあれができる」という気持ちで明るく話してこそお互い前向きになれる。プラス思考で生徒を眺めると小さいけれど成長の芽やキラッと光る良さが見えてくる。それらを認め広げる役割も楽しい。
- ③ 常に心を開いて待つ・・・生徒にも親に対してもまた職場の同僚に対しても常に心を開いて待つ姿勢が大切である。その中でこそ多くを学ぶことができる。苦しいときこそありのままの自分をさらけ出し他人との関わりの中で成長するモデルを示したい。

(2) 生き生き楽しい教室掲示の工夫（教室経営）

物的環境をどう整えるか。これまで教室は教師が教育していく場と同時に、子どもたちの活動す

る場でもある。学校の主人公としての子どもたちの側からの教室経営を考えてみた。画一化された教室掲示や学習用具が散乱し薄汚れた教室の雰囲気を一変し、クラスの仲間意識を高めるようなものでありたい。みんなの気持ちを一つにまとめ、生徒たちの長所と活動の姿が生き生きと見える学級掲示を工夫していきたい。

- ① 教室美化の一環として・・・視覚的にまた美的に優れたものを追求する。現代の子はなかなかアイデア豊富である。生徒の持ち味を引き出しながら生活環境にも興味関心をもたせ、お互いの共有感・達成感のあるものを追求したい。
- ② みんなが認め合い喜びを共有できるように・・・みんなが喜んでながめるものでありたい。学級の構成員全体にとって誇らしい内容のものを、あるいは級友の優れたところ・自分たちクラスの頑張りを表現できる場でありたい。
- ③ 温かな雰囲気づくり・・・生徒の心に寄り添う形で生徒を激励したり、教師からのメッセージ性のある掲示物で心の交流を図る。また学校・学年・学級行事などと連動し盛り上げていく内容で生徒間の交流を促し、温かい心とむものでありたい。

4 「共に生きる」中の対話・交流活動

(1) 対話・交流活動の意義

目の前の子どもたちは、好きな漫画・室内一人遊び・テレビ映像の中にこもり他者との対話から身を引きがちである。一人一人が分断され孤立化し、不安に陥っている子どもたちの姿があちこちで見受けられる。話すことによってお互い分かり合えるし、言いたいことをぶつけることによって理解が深まりより信頼感が強まるという体験を数多く持つことが大切である。しかし、子どもたちの現実はいずれもそれを実現する根本とも基盤ともいえるべき他者との交流や交わり能力とも言われるものの衰弱化が著しい。また「対立や衝突を避けようと過敏な神経を働かせる」（深谷和子）の指摘も納得できる学級の実態がある。前述した子どもを取り巻く状況、学級の子どもたちの実態を踏まえ、学級での対話・交流活動を取り組む意義を次のように考えた。

- ・対話することによって相手との問題状況を共有できる。（生活の共同化）
- ・対話することによって違いを認めつつ、共通なものを確認できる。（自己理解・共感）
- ・他者との交わり能力の技術を鍛えることができる。
- ・対話・交流活動を通して物の見方・感じ方を発展させることができる。

日常生活の中で、見つめ・発見し・経験するなどの上記の活動を繰り返すことが大切である。共感・信頼感・安心感という感性を広げるのに対話・交流活動は有効であると考えている。

(2) 対話・交流活動の内容

① 対話・交流活動の定義

対話とは対等な人間として共通の主題や課題について言語を通して合意と了解の方向に進む話し合いである。1対1あるいは複数対1あるいは複数対複数もあると考える。また、口頭だけでなく書き言葉での対話など幅広く捉えることとする。交流は直接対話するという関わりでなくてもクラスの中に理解や発見につながる人との交わりあいをもつ活動と規定したい。

② 対話・交流活動のための視点

- ア 他人の良さを発見し、認め合い・高めあう内容であること。
- イ 自分と他者との関わり方を見つめ直し・生き方を考える機会とすること。
- ウ 「共に生きる」を常に問いかけ、考えさせる内容であること。

③ 対話・交流活動のステップ

これまでの経験から他者にどこまでどのように何を介して関わればいいのかわからない。また自意識が強まる中学生の時期でただでさえ他者に対して心を開きにくい年代である。そこで、対話・交流活動を広げていくため以下の図3に示すように個人的なおしゃべりの類から全体の場での発

言ができるまでの段階を次のような考えてみた。

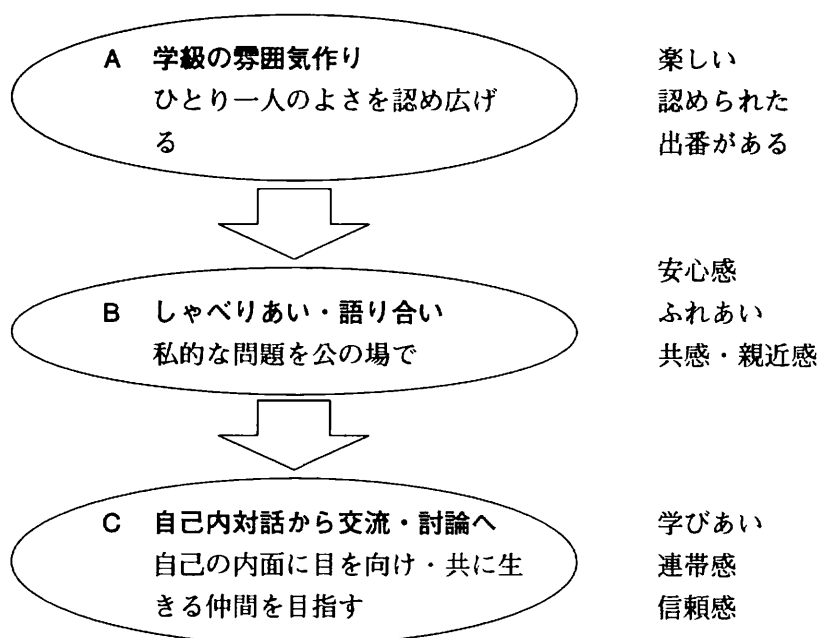


図3 対話・交流活動のステップ

④ 対話・交流活動の場作りと展開

対話・交流をさせていくねらいは、「対話・交流」そのものの技術を学ぶためでもあり、同時にその体験を積み重ねていく中から「共に生きる」という人としての生き方を考えるためのものである。他者に受身でなく積極的に関わっていく活動ともいえる。どのような場を作りどのように展開していったらよいか考察していく。

ステップ	場の設定	展開のイメージ
A 学級の雰囲気作り	*仕掛けづくり 学級通信 給食時間 当番活動中 休み時間・掲示物	授業以外での生徒と教師のおしゃべり、生徒どうしのおしゃべりの輪を積極的に推進する。学級通信の役割を①教師の生徒を見る眼を鍛える②生徒のよさを共有する広場③親と教師の気持ちをつなぐものと位置づけ積極的に活用する。また、個々の生徒のよさを認め合う場として掲示物を工夫する。
B シャベリあい・語り合い	*小さな対話交流の輪を数多く 班会議 学級活動	の授業の時間にグループで問題を出し合い①どんなことがあったの②どうしたほうがいいと思う。この2点を柱にしゃべりあい。身の上相談的・経験の話し合いなどであえて結論や教師の支援を性急に求めない。みんなが本音で語れるような仕掛け作りが重要。
C 自己内対話から交流・討論へ	*課題に気づかせる *時宜を逃さず 道徳・学級活動 給食時	生活現実から自己の内面に目を向けさせ考えさせる場の設定。また共に生きる仲間としての視点での行動・生き方を考え実践につなげる場の設定。真剣に語る大人の生き様に触れる機会の設定。日常を活性化し元氣な楽しい行事づくりなど自ら作りだす経験に発展させる。

5 「共に生きる」学級経営

(1) 「共に生きるシリーズ」

道徳と特別活動の連動

学級活動や道徳がうまくつなげられず単発の活動になっていた。しかし、学級の身近な問題をととして自分の内面を見つめさせ・実践の手立てを考える。「共に生きる」という視点で道徳／特別活動の有機的つながりを考慮し先のプログラムに従い計画をたててみた。

(2) 年間指導計画（試案）

	内 容	対話・交流 (ねらい)	その他の活動
一 学 期	ウォーミングアップ（教師主導） ① 学級開き 教師の思いを語る ② 「教科書を忘れた」（日常生活から） ・ 知らんふりの自分の内面を見つめる ・ クラスの仲間としてどうか ・ 人との関わり方を考える ③ 楽しみ給食会（ゲストを招く） 校内の先生を一人迎えて食事しながら インタビューに答えてもらう。	交流（楽しい・頑 張れそう） 自己内対話 認め合い 共感 思いやり 安心感 交流 ふれあい 親近感	自己紹介交流カード掲示 学級通信・家庭訪問記 毎日一週間訪問記を学級通信 に書く。「間接交流」 学級掲示活動の充実 （学級旗・校内陸上と連動） 給食時間
二 学 期	お互いを認め合い・信頼しあう（生徒中心） ④ 私の夏休み報告（B 6 絵手紙） ⑤ 不登校生徒のとりくみ ・ 自分との対話・学校へ行きたくないとき ・ 学級としてできること ⑥ 語り合い／班会議 * 身の上相談的・・・どうすればいいか	交流 認め合い 他者理解 自己内対話 自己理解 他者理解 認め合い 対話・交流 共感 親近感 ふれあい	私の夏休み・・・担任作文発表 夏休み報告全員掲示 学級通信・夏休みの活躍報告
三 学 期	共に生きる仲間として（自ら創る） ⑦ ○○さんを訪ねて・・・ビデオ訪問 ⑧ お楽しみ給食会（ゲストを招く）	対話 対話の方法 話し合い 他者理解 交流 共感 自己理解 意欲的	学級文集作成委員会発足 進級激励の手紙（親・去年の 先生から）

Ⅳ 授業実践

1 検証授業について

子どもたちの関わりあいの中で、「神経過敏」と「無関心さ」が象徴的に「教科書忘れ」という事象についての問題を教師の側から提出してみた。「教科書忘れ」をどうすべきかではなく、隣の人が教科書を忘れた場合の自分の言動を振り返り考えさせたい。このことを通して人との関わりや自分の生き方を見つめるきっかけにしてほしいと考え授業を試みた。

2 検証授業

- (1) 主題名 相手を思いやる
- (2) 題材名 「教科書を忘れた」
- (3) 主題設定の理由

① 価値観

生徒たちは「無視」という言葉に敏感に反応する。自分が無視されることに関してはとても過敏である。反面自分たちの行動はというと自分と関わらないとまわりの世界とまったく断絶して無関心である。クラスの友だちにあるいは隣の席の人であっても「～したほうがいいよ」とかまたは「～しますか」とあえて提言する生徒同士のかかわりはあまり見られない。この無関心な態度・潜在的無視とも取れる態度に気づいてほしい。友達の感じ方や思いに心をくばり、自分の周囲の人に「思いやり」持つことによって相手を理解することができ、自分との違いを認識できる。自分たちが何気なくやっている行動はあまりに無関心で無視する態度になっていないか自己の内面をみつめさせることが大切と考える。

② 生徒観

明るく活発なクラスで授業も進めやすい。アンケート調査でも友人関係も比較的良好という結果である。しかし

表1 「Q-U楽しい学校生活をおくるためのアンケート」調査人数36人

し、何人かの生徒が不安と緊張の中で過ごしているのは見過ごせない。いじめと取れる数値もあるが他人を不愉快にする言動がある。横のつながりが十分でないため、少し

質問項目（1 思わない・・・5 思う）	1	2	3	4	5
① 仲の良いクラスと思う	3%	6%	44%	31%	17%
② クラスで活動するのは楽しい	14	19	36	22	8
③ 無視されることがある	69	11	11	6	3
④ 冷やかされることがある	69	19	6	6	0
⑤ ひどい悪ふざけがある	69	14	8	3	6
⑥ 一人でいることが多い	63	6	17	6	9
⑦ 周りの目が気になり不安を覚える	44	17	19	17	3
⑧ 友だちは自分の成長にとって大切である	0	3	20	17	60

のことにも過敏に反応したり、不安に思ったりするのではないかとと思われる。しかしながら、友人とのつきあいは自分の成長にとって大切だ（表1⑧ 77%）と、お互いの学びあいに期待をかける前向きな姿勢がみられる。学級全体としての取り組みの中で対話の場を設定し広げることによってこれからの個々の成長につなげたい。

③ 教材観

日々の生活を見ると、同じ学級内のことでも生徒たちのつきあい、関わり方に気になることがしばしばある。隣が教科書を忘れていないのに気づかなかったり、気づいているのに何も関わりを持とうとしなかったり、また、自分から見せてほしいというような場合もほとんどない。これが一般的な状況として頻繁に見受けられ生徒たちにとって普通の状態になりつつある。教師の側からの問題提起として学級の仲間としての関わり方、人間として共に生きることを考えるきっかけにしたい。

④ 指導観

人からどう評価されるか。人からどう思われるかということをととても気にして親しくない人との会話から身を引きがちである。そんな中で公の場で自分の意見や考えを述べることはかなりの勇気の要ることである。正解を求める形にならぬよう、また価値観の押しつけにならぬよう生徒の気持ちに寄り添い一緒に考える姿勢で臨みたい。経験の乏しい生徒たちが自分の意志・気持ちを警戒せずに表現できるようロールプレイを取り入れ、演技という形で多様な自分たちの姿を客観化することにより考えを深めさせたい。また、経験交流・身の上相談的な活動内容にすることで実践をイメージし易いのではないかと考えた。

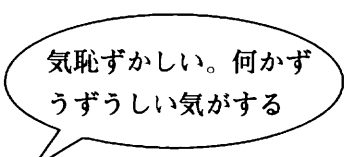
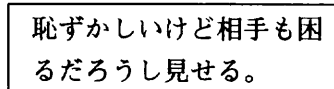
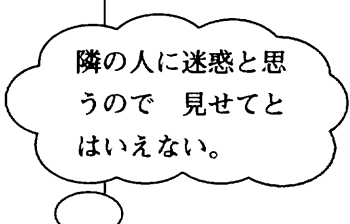
(4) 本時の指導目標

- ・日常生活の中での仲間どうしの関わり合いの希薄さに気づかされる。
- ・相手の立場を思いやったり、気持ちを考える大切さに気づかせる。

(5) 授業の仮説

身近な共同な生活の問題について意見を出し合うことによって、共感や親近感が生まれお互いの考えや気持ちが理解できるだろう。

(6) 本時の展開

時間	学習活動	教師の支援	留意点・評価
5分 一斉	題材の場面設定を理解する。 5人の生徒で題材ロールプレイ。	題材名の板書 「教科書忘れ」を考える	あっさり・短く
5分 一斉	自分だったらどうするか考える。	挙手による全体把握 ・自分のほうから見せてあげる 3名 ・自分のほうから見せてと言う 0名	自分から積極的に関わらないことに気づく。
10分 グループ	グループに分かれて、なぜ自分のほうから声をかけないのか理由を話し合う。 理由の発表 1～8班	グループ編成と話し合いの指示をする。  教師が黒板に聞き書きする。  	手早く移動の工夫 本音の気持ちが出せたか。
15分 一斉	理由としてあがったものと自分の考えを比較する。	自分から言い出せない理由の中から2・3取り立て話し合いをさせる。 例 嫌いだから 恥ずかしいから 何か言われるから 人の関わりで何が大切と思うか。	他人との関わりに関するものを抽出。 机間巡視 簡潔に短く書く

10分 一斉	授業の感想を書く。 評価用紙記入	教師の予告 今日の評価 みんなも似たようなことを考えて悩んだりしているんだなど	同じ悩める人間として 回収・観察 みんなも同じ気持ちだったんだなぁと思ったちょっと安心した。
-----------	-------------------------	---	--

3 授業の考察

- ・題材について・教師のほうで提示した題材で、授業も活発な意見交換にならなかったのにアンケートによると25名の生徒がクラスのこれからは役立つと答えている。生徒たちもこの問題について何となくすっきりしないまま過ごしていることがうかがえた。
- ・対話ということについて・まだ討論になりえない意見交換としての対話であるが生徒たちの感想をみると「自分と同じように思っていた人が多かった」など共感をもって受け止めた生徒が8名。全体としてみんなの考えがわかってよかったと好意的に受け止めている。
- ・うまく生徒の声を引き出し、からませきれなかったので不透明な部分が多いが、自分の内面をみつめるささやかな一石になった。日常的に継続していくことが大切と思う。

V 研究の成果と今後の課題

1 成果

- (1) 身近な生徒たちの言動からの教材化が有効でありロールプレイなど多様な方法で学級活動・道徳の授業に生徒の興味関心が高まった。
- (2) 自分の思いを話すことにより親近感や共有感が広がるのを体験し、生徒が同様な問題について気軽に話題にする雰囲気できた。
- (3) 授業の事前・事後の指導の中でクラスのことについて対話する機会が増え、人との関わりを考えるようになった。

2 今後の課題

- (1) 生徒理解をさらに重要視しもっときめ細かに理解の方法の研究に努めたい。
- (2) 道徳・学級活動などの連動も含めて楽しい活動の創造に力を入れたい。
- (3) 心を閉ざしがちになる現代の生徒たちの心にアプローチする話し合い活動の実践を積み重ねたい。

<主な参考文献>

門脇厚司	『子どもの社会力』	岩波書店	1999年
深谷和子	『「いじめ世界」の子どもたち』	金子書房	1996年
尾木直樹	『現在を生きる中高生』	日本書籍	1998年
辰野千寿	『教室の心理学』	教育出版	1998年
文部省	『生徒指導の手引き』		1994年
坂本光男	『学級集団づくりの原則』	明治図書	1988年